⑬ 雪のふる道

雪のふる道　　永四亥の冬

はからす
寛兆老人に
会し杖を
おさゆれとも
寒天に向て
寒国に帰る
実に勇なるかな
雅なる哉

鶴氅と
にこ〳〵着るや
雪の簑　　東都　星霜菴　北正

各前書略之

しつり雪下葉うけ取はつしけり　蘭路
夕飯は行燈となるさむさ哉　北治
鳩は木に礼を正して時雨哉　棒外
大雪に力見えたり松の老　治鳥
根分したやうに殖たる時雨哉　北松
小名主も遊里通ひや麦の秋　子皎
宿引にひかるゝ袖や雪曇り　梅史女
山茶花や無病な空の打続き　北一
しからるゝ夜は住安し鰒と汁　北羊
蒼海も浅しとつくか雪の杖　藍水
足元の鳥に立るゝ師走かな　梅烏
忠孝の重きに軽し笠の雪　北吉女

枇杷盗み捕へて　　二世　互扇楼　子彦子
酒の相手かな
机にむかひはうつる

諸君諸子混題

千金の価おろかや夕さくら　亥芝堂　子孝
夜興曳や采配ゆるす山かしら　子山

天平のむしろはまねな岡見人　北亜
怠りを風の補ふ鳴子かな　北倩
待受た戸にもとりけり雪の鳥　北虎
婆婆役に咲て見せけり木蓮花　暹烏
雪折や夫から何の音もなき　旭烏
氷る夜や風に先立下駄の音　一貫
珠とりにいさ漕出ん月の海　暹興
一船て手のうてにけり夏鰯　子徳
三尺のぬきさしするや雪の杖　朶暁
畳さす小家や盆の月明り　文河
湖の夜や明わたる山のつゆ　九賀
七夕や手向の笛も一夜きり　窓雅
冬を待心覗くや黒木うり　五友
置露の置きは落る草葉かな　青雅

御簾巻て置直させつ鉢の菊　彦岐
行合の雲しはらくや天の川　東林
和らかな酒に酔けり夕紅葉　彦俄
灯の影深草や露しくれ　秀丸
星の名を算へもとるや鳴千鳥　彦岱
接待やうとん花の咲人こゝろ　芳秀
朝露や蝦夷地にちかき七合帆　其文
鎌首に朝戸する軒や後の月　桂林
快よきはこたひや後の二日灸　素厚
孫持て祖父祖母おもふ雪見哉　糸女
蕪島や蒔ぬかふらの花盛り　楠枝
山吹や踏めは水涌く此当り　交簫
山ふきや池の底にも咲夕日　大野　亀疑
染色の思案出来たり花あやめ　同　以文
久慈平や八重立峯の雪けしき　同　庭好
巽山比良の暮雪に増月夜　久慈　彦枝
朝貌の朝茶出る間にしほれけり　野田　窓渕
しら萩のまたかりて咲小川かな　同　野遊
鴛鴦のはれかましさや鴨の中　宇都宮　其翼
時人をまたすけしちる夕へかな　須賀川　清民

よし切や世話しう啼て場も替す　大川原　江三
朝夕の日のさし入るや冬の梅　槻木　詠柳